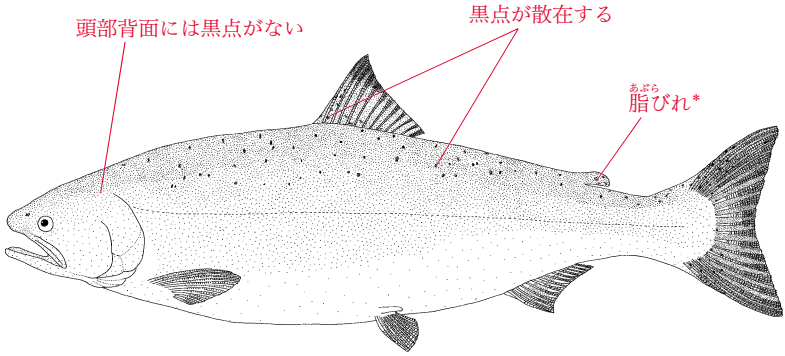
サケ目Salmoniformes サケ科Salmonidae




## 30. サクラマス(ヤマメ) *Oncorhynchus masou masou* (Brevoort) 図版12、13

**英　名**　masu salmon, cherry salmon

**露　名**　сима

**地方名**(北海道)　ホンマス、マス、クチグロ、イタマス、イチャニウ(以上、降海型*)、ヤマベ（河川残留型*および降海*前幼魚*）

**漢　字**　桜鱒、本鱒、口黒、板鱒、山女魚

**アイヌ語名**　サキペ、イチャニウ、チュキチャヌイ（以上、降海型)、イチャンカオツ、キㇰレッポ、ポントクシ(河川残留型および幼魚)

**【形態】**　海で生活するサクラマスは体の背部が暗青色から暗緑色、体側が銀白色、腹部が白色。頭部を除く背部と背びれ、脂びれ*、尾びれに黒点がある。体形は比較的細長いが、まれに「イタマス」と呼ばれる体高*の著しく高い個体もある。また「クチグロ」と呼ばれる口の周辺の黒い個体が、秋から冬にかけて漁獲される。

河川に遡上*すると体側の銀白色の金属光沢を次第に失い、産卵期が近づくと二次性徴*が表われ、雄は全体に黒ずみ、桜色の不規則な雲状斑が浮き出た婚姻色*を示す。同時に吻*は伸びて下へ曲がり、両あごの歯が強大になる。雌も婚姻色を示すが、雄ほど顕著ではない。

サクラマスの降海*前の幼魚*と、河川残留型*すなわち降海せずに河川で一生を過ごすものをヤマメ（北海道ではヤマベ）と呼ぶ。なお関東でいうヤマ

べは、コイ科のオイカワ*Zacco platypus*のこと。ヤマメの体の背部は黄褐色で、小黒点があり、腹部は白色。体側に7～10個のパーマーク*と、背部の黒点より大きい黒色斑がある。側線*に沿って淡い赤燈色の縦帯*がある。天然のヤマメには背びれ、腹びれ、尻びれの先端に白色部を持つものがある。

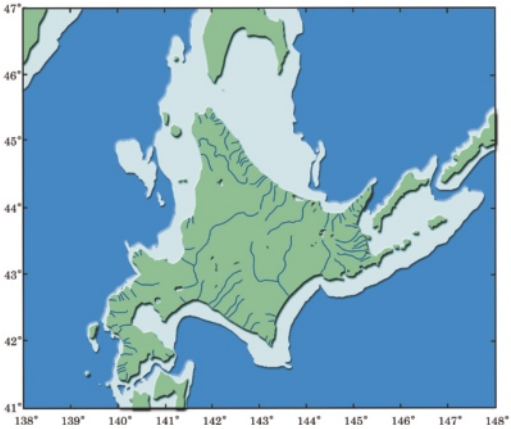
降海時期には体側が銀白色に変わり、パーマークが見えにくくなり、背びれと尾びれの先端が黒くなる。これをスモルト*または銀毛*という。降海せずに河川で性成熟*したヤマメも体色は黒ずむが、サクラマスのように桜色にはならない。

海洋での成長は個体差が大きく、降海型*は尾叉長*35～70cmになる。河川残留型はふつう15～20cmで、まれに30cmを超える。

**【生態】**　日本海、オホーツク海、北太平洋に分布。ただし北太平洋では多くが北海道太平洋沿岸域と三陸沿岸域に分布し、沖合域ではまれである。春に降海した幼魚は、成長しながらオホーツク海で夏を過ごし、日本海と北太平洋で越冬する。

北海道各地の河川に産卵のために遡上するが、特に日本海側とオホーツク海側で多い。本州では千葉県と山口県以北。日本のほか、朝鮮半島の東部から沿海地方、サハリン、カムチャツカ半島の西岸の川にも上る。北太平洋岸全域の河川に上るほかのサケ属*魚類と異なり、分布域が太平洋のアジア側に限られ、かなり南にまで遡上河川があることが特徴。

ヤマメはサクラマスが遡上する地域のほか、本州の神奈川県酒匂川以北と日本海側のほぼ全域、九州西北部にも分布する。台湾の大甲渓には亜種*のサラマオマス*Oncorhynchus masou formasanus*がいる。



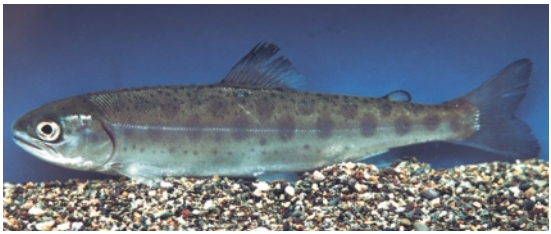
北海道でサクラマスが遡上する主な河川
（待鳥・加藤、1985を改変）

1年間の海洋生活を経たサクラマスは、生まれた川に遡上する。その時期は6～7月が中心だが、地域や個体によってかなりの差がある。早いものは雪解けと同時に川を上り始める。9～10月に川に入る魚もあるが数は少ない。産卵間近に遡上するサケやカラフトマスと異なり、サクラマスの

親魚は３～５カ月を川で過ごす。川に入ったサクラマスは深みや物陰であまり動かず、雨で増水した時などに川を上る。川に入ると餌はほとんどとらない。

北海道での産卵期は８月下旬～10月上旬で、盛期は９月中～下旬。親魚は河川の上流域や支流までさかのぼり、水通しの良い砂れき*底に卵を産む。水深12～45cm、流速毎秒50cmほどの所が多い。通常、雌１尾に対して数尾の降海型雄と多数の雄ヤマメが追尾し、産卵行動をとる。30尾を超すヤマメが群がることもある。雌が産卵床（しょう）*を掘る間、ペアとなった降海型の雄は、近寄ってくるほかの雄やヤマメを盛んに追い払う。サクラマスのペアが体を寄せ合って産卵、放精する瞬間に、これらの雄も突進して放精する。雌は産んだ卵を埋め、しばらく産卵床を守るが、やがて降海型の雄と同様に死ぬ。１つの産卵床に数回に分けて産むか、複数の産卵床をつくる場合が多いようである。

産卵床内の水温は川の水とほぼ同じ。卵は11～12月にふ化し、仔魚（しぎょ）*は翌年の３月下旬～５月上旬には卵黄を完全に吸収して、稚魚*となり浮上*する。卵や仔魚の発育速度は水温と密接にかかわり、受精から浮上までの日数は水温が低いと多くなる。



サクラマスの稚魚（上）、河川残留型の雄（中）およびスモルト（下）

浮上した稚魚は尾叉長約３cmで、岸近くの流れの緩い所に群れ、雪解けの増水などによって下流へ分散し、上流域から中流域に至る広い範囲に分布するようになる。夏の間、大型の幼魚は流れの速い瀬*でなわばりをつくり、それより小さい幼魚は平瀬（ひらせ）*や淵（ふち）*に群れて生活することが多い。

初夏までの成長が良かった雄は、その年の秋に体色が黒みを帯び、河川残留型として性成熟する。それ以外の魚のうち、秋までに８～９cmほどに育った幼魚は、翌春に満１歳で降海する。その

なかには、降海前の秋に体側がやや銀白色になるものや、越冬前に下流側に移動したり、移動後に枝沢に入るものがある。冬にはササや枯れ草などに覆われた川岸近くの流れのほとんどない場所で、じっとして春を待つ。

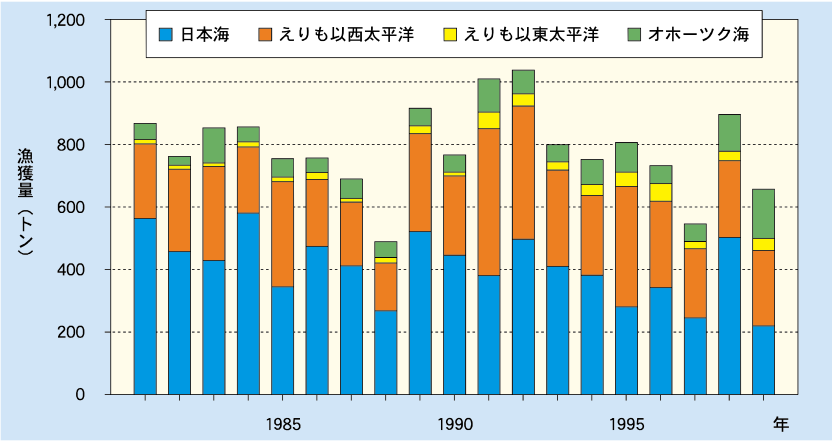
融雪増水が始まるころから川を下り、海へと向かう。その間に体色の銀白化は著しく進行し、体形も細長くなり、群れをつくる性質が強まる。降海時の尾叉長は9～20cmで、多くは11～15cm。降海の盛期は北海道南部で4～5月、北・東部で6月だが、北部では7月でも川を下る個体がみられる。

一方、1年目の成長が悪くスモルトに変態*しなかった個体は、もう1年川に残り満2歳の春に降海する。この個体が出現する割合は年や地域によって異なり、幼魚期の成長と関連が深い。満2歳のスモルトは、満1歳に比べて体サイズが大きく、降海時期もやや早いことが多い。

北海道では雌のほぼすべてと雄の約半数が降海するが、南ほど雄の河川残留型の比率が高い。本州では雌にも河川残留型が多く出現する。

北海道や本州の川から海へ出たサクラマスは、北海道の日本海側と太平洋側の沿岸を北上または東進してオホーツク海へ入る。幼魚は表層が8～12℃の好適な水温帯とともに移動し、成長に伴って沿岸からしだいに沖合へと分布を広げる。オホーツク海で夏を越した後、水温の低下とともに南下を始める。北海道南部から本州中部にかけての日本海、本州北部の太平洋および津軽海峡付近で越冬し、春には生まれた川を目指して北上する。

稚魚は初めユスリカの幼虫などを餌とし、成長に伴い水生、陸生の昆虫を主に食うようになる。降海してまもない幼魚は甲殻類プランクトン、イカナゴ幼魚を食う。海では成長とともに魚食性が強まり、魚類、イカ類、オキア




北海道沿岸におけるサクラマスの漁獲量

ミ類*などを捕食する。北海道沖日本海のサクラマスはイカナゴを、冬に北海道東部太平洋沿岸を回遊*するものはスケトウダラの幼魚を多く食べる。